

藤本隆士著『近世匁錢の研究』

はじめに

一枚ごとに同じ価値を持つ錢貨が、紐などで一定数に束ねられると独自の貨幣単位となり、ひとたび紐が解かれバラバラとなると、もとの一枚ずつの錢貨に戻る。本書は、この「匁錢」と呼ばれる近世日本の錢貨の存在形態をめぐる研究に長年取り組んできた藤本隆士氏が、一九五〇年代から二〇〇〇年代までに発表した論考をまとめたものである。

藤本氏は、北部九州の経済史・貨幣史を研究するなかでこの「匁錢」という一見奇妙な錢貨のあり方に対して最初

古賀康士

に学問的な問題提起を行い、近世日本における錢貨の歴史の意義について活発な議論を生み出すきっかけをつくった。この分野の研究において欠かすことのできない論考が、一書として体系的にまとめられたことに後学の一人としてまじり喜びたい。

内容に入る前に、本書の主題となる「匁錢」について予備的な説明をしておこう。

「匁錢」とは、一定量の錢貨を「文」ではなく銀貨の単位の「匁」で計算・使用することと定義される。こうした使用法が史料上で確認され始めるのは、一般的に一八世紀前半以降で、当初「錢一匁」は時々の銀錢相場を反映して

銀一匁と等価なことが多かったが、やがて九州を中心とする西南地域などで一匁あたりの銭量の固定化が起こり、銀相場とは乖離した独自の貨幣単位として振る舞うようになる。何文の銭で固定化するかは地域ごとに異なり、福岡藩などでは「六十文銭」（一匁 \equiv 六〇文）、九州幕領では「十九文銭」（二匁 \equiv 一九文）が定着した。こうした貨幣現象は、著者の問題提起を踏まえて全国的に事例分析を行った岩橋勝氏により、藩札・私札なども含めて「銭匁遣い」・「銭匁勘定」とも総称される⁽¹⁾。

この匁銭がいかなる実態と歴史的意義を持つのか。この問いを主題に本書の議論は展開する。以下、まず全体の構成と内容を整理し、次いで本書で提示される見解を吟味しよう。

一 本書の構成と内容

本書の構成は次の通りである。

序説

第一部 福岡藩の経済政策

第一章 福岡藩戸蠟仕組と藩国家への傾斜

第二章 「金銀札銭記録」に見える銭貨

第二部 近世商人の経済活動

第一章 天領日田商人資本家の経営

— 掛屋千原家の場合 —

第二章 近世福岡藩の農民行動

— 鞍手郡新山崎村の例 —

第三章 近世農民商人の一形態

— 林文雄家文書「萬年代記帳」を中心に —

第三部 匁銭の成立と実態

第一章 近世貨幣流通の実態と計算例

— 地域史研究のために —

第二章 近世福岡藩における銭貨流通

— 「匁銭」成立を求めて —

第三章 近世西南地域における銀銭勘定

— 匁銭の取引実態 —

第四章 秋月藩の匁銭と札 — 硬貨と札と価値と —

第四部 銭貨の流通と匁銭

第一章 九六銭と匁銭

第二章 再び匁銭について

第三章 徳川期における小額貨幣

— 銭貨と藩札を中心に —

終章 匁錢の源泉と流通

—日本西南地域から東アジアへ—

本書は、第一部で経済政策、第二部で民間経済、第三部・第四部で主題となる匁貨の問題を扱うという四部構成をとる。前半には匁錢の議論に関係する論考が集められ、著者の眼目が後半の第三部・第四部にあることが窺える。

各章とも既発表の論考が中心だが、著者の現在の到達点を示すため、序説と終章が新たに書き下ろされ、一部の章には改稿も加えられた（第三部第三章など）。

まず新稿の序説では、本書の分析対象と目的が提示される。同じ小匁貨幣として共通する部分が多い藩札などは原則として対象から外し、匁貨特有の現象である匁錢と九六文を一〇〇文と見なす「九六錢」（省錢・省陌の一種）に焦点を絞り、その実態解明とそれらが生成される源泉を東アジアの交易関係にまで遡って考察することが目的とされる。

第一部は、福岡藩と秋月藩の経済政策、特に戸蠟の専売制と貨幣政策を分析する。第一章では、寛政八年（一七九六）から始まる福岡藩の専売制を取り上げ、同藩の大坂商人に対する強権的な姿勢に「藩国家」としての自立を認め、その背景に匁錢が「領国貨幣」として機能し、藩経済の掌

握が可能となっていたことが指摘される。第二章は、秋月藩の大庄屋に残された「金銀札錢記録」から匁貨・藩札関係の記事を分析する。匁貨については農村部での広範な流通のほか、西南地域では匁錢の形態をとり計算貨幣などとして高額取引にも使用されたことを示し、単なる補助貨幣として匁貨を捉える考えを否定する。

第二部では、民間部門の経済活動と貨幣現象に焦点が当てられる。第一章は、豊後日田の豪商千原家の土地集積過程を分析する。幕領の掛屋として公金取り扱いを梃子に経営拡大した千原家にとって、地主—小作関係の維持は領主権力に依拠し、それゆえ領主の取得部分を浸食してまで地主制を展開できなかったと結論付ける。第二章・第三章は、福岡藩東部の庄屋が書き残した年代記をひもとき、近世村落の年貢負担をめぐる諸機能と農村部で振り売りや日雇いを行う「遊民」の存在から、商品貨幣経済の進展によって小匁貨幣の匁貨が農村部に広く普及したことを示す。

第三部では、匁錢の成立過程と実際の史料上の記載事例が検討される。第一章は、主に『古事類苑』や草間直方『三貨図彙』を引き、三貨制の成立過程と匁錢の計算例を示す。第二章は、福岡藩における匁錢の成立過程が分析さ

れる。一八世紀初めの幕府の貨幣改鑄による銀貨の不安定化が匁銭成立の契機となり、やがて錢遣いの拡大に伴って匁銭の錢量が銀錢相場とは乖離し、九六錢の一貫緡（九六〇文）の約数からなる六〇文と八〇文で固定化することが示される。こうした匁銭は、領国貨幣の消失と並行して成立することから領国内の価値尺度機能を担う「領国計算貨幣」と評価される。続く第三章では、平戸藩生月島の捕鯨経営主益富家の「算用帳」から西南地域の匁銭の取引実態が例示され、海上交通を介して錢貨が大量移動した可能性が示されるほか、益富家の経営帳簿が錢一〇〇文を一匁とする計算貨幣によって統一されたことが明らかにされる。第四章では、秋月藩の匁銭と札の事例から民間経済で錢貨が価値尺度機能を担う貨幣として選好され、それが匁銭の成立とそれに基づく藩札の発行に繋がったとする。

第四部は、匁銭を流通面から捉え直す。第一章は、九六錢と匁銭の実態と両者の関係を検討し、匁銭が領国貨幣として成立する背景に、商品貨幣経済の進展に伴って小額貨幣の錢貨が農村部へ浸透し、経済構造が大きく転換したことを指摘する。第二章では匁銭の生成過程が改めて論じられ、匁銭が銀不足に対応して銀貨の代替的機能を果たした

ことが再確認される。第三章は、小額貨幣の観点から錢貨と藩札が総括的に分析し、高額貨幣と小額貨幣の重層的流通のほか、匁銭と藩札が領国経済の自律性を担保したことなどを明らかにする。

終章では、これまでの議論が要約されたのち、九六錢と匁銭の源泉が東アジア、とりわけ日本と清朝の交易関係にあったことが主張される。具体的には、銅貿易などで使用される「斤」の単位が日本と清朝で共有されたこと、そして一斤＝一六〇匁（六斤＝九六〇匁）の関係式が清朝の銅錢と日本銅の「等価交換基準」であったことから、その約数を基に九六錢および匁銭が生み出されたとし、九州を中心に通用した匁銭が近世東アジアの国際的な交易関係を反映したものと結論付ける。

二 批判的検討

著者による近世日本の錢遣いに対する問題提起から半世紀余りを経た。本書はこの間の長期の論考を集めたこともあり、記述の重複のほか、著者自身、あるいは岩橋勝氏を始めとする同様の問題関心を持つ研究者たちによってすでに論証された史実もある。そこでここでは議論を整理する

ため、本書で提示された見解を五つの命題にまとめ、その妥当性と含意を検討したい。集約化した命題には、研究の現段階で自明となった事項もあるが、これまでの研究史の厚みとその到達点を振り返るために省略を加えずに記述する。また命題自体が持つ可能性の広がりを探るため、評者の理解・解釈を適宜交えて検討したい。

まず第一の命題は、近世日本の銭貨が単なる補助貨幣ではなく、金・銀とともに基準貨幣の一つとして機能したというものである。

著者による匁銭の研究が始まる以前、小額貨幣の銭は、高額貨幣の金・銀の端数処理など、貨幣的な機能が制約された補助貨幣として認識された。こうした考えは「東の金遣い、西の銀遣い」といった慣用句と共に、近年まで続いた根強い見方であった。地域的な多様性を特徴とする近世日本の貨幣史像が、江戸や大坂といった金遣い・銀遣いの中核的な地域の事例分析を基に再構成された必然の結果でもある。

藤本氏の北部九州を中心とした匁銭の研究、およびその問題提起を受けた岩橋勝氏の列島レベルでの「銭匁遣い」の研究は、こうした銭貨を副次的な貨幣と捉える通説に対

抗して進められた。銭貨が域内の価値尺度を担う貨幣となり、また支払手段として高額取引などにも使用されること、こうした近世日本の銭遣いの特徴は、東北・山陰・西南地域など周辺の地域の経済・貨幣現象を分析する上で、現在にはほぼ自明の前提となったといつてよい。

第二の命題は、匁銭が実質的な価値上昇を伴う省銭（短陌慣行）とは異なり、一匁を構成する銭量以上の価値を有しないということである。この見解は、著者が適切な計算例を提示しており、特に補足の必要はない。六〇文銭一匁は銭六〇文であり、一九文銭一匁も銭一九文と等価となる。ただ、この実質的価値に関わる命題は、これまで必ずしも自明ではなかった。例えば、表面的な類似から特定の枚数を一〇〇文とみなす省銭として匁銭が解釈されたことや、地域ごとに財・貨幣の価格差が顕著に現れる伝統中国との比較から、匁銭についても一匁の価値が各藩の公定の銀銭相場とされたこともあった。だが、これらはいずれも著者が明らかにした計算方法を誤って理解したものである。

x文銭一匁は銭x文の価値しかなく、そこには単純な等式しか存在しない。

こうした匁銭の貨幣換算におけるある種の単純さは、匁

銭がなぜ存在するのかという点を考える上で厄介な問題を抱えている。省銭では価値上昇を伴うことから、緡紐の代価や銭の数え賃、あるいは銭貨不足への対応といった意図を読み取ることができる。また銀銭相場の固定化とみなしても、そこから地域経済の特質などを導き出せる。これに対し、匁銭はそうした解釈を許容しない。なぜ、価値の変化を伴わない、経済的に殆ど「無意味な」慣行が存在するのか。匁銭の存在理由を考える時、換算式に現れる単純な等式は一種のトートロジーのように響くのである。

藤本氏は匁銭に様々な歴史的意義を付与することで、この「無意味さ」を克服しようとしたといえる。前節で見たように、匁銭を「領国計算貨幣」と捉えることで近世中期以降の藩領国における経済的自立の動きを貨幣史的に説明できる。また匁銭を九六銭と接続させて理解することも、さらに東アジアの国際的な交易関係のなかに両者の源泉を見いだすことも、究極的には、計算上は中立的に振る舞う匁銭にいかの意味を見出すかという問題に関係しよう。

第三の命題は、匁銭の成立に関わる主張である。すなわち、匁銭は一般的に緡紐の形態をとって民間経済のなかで自生的に成立したもので、北部九州の場合、その成立時期

は幕府銀貨の価値変動が激しかった一八世紀初頭である、というものである。

この匁銭成立に関する命題は、著者がフィールドとした北部九州に関しては妥当性が高い。福岡藩の場合、一七世紀から一八世紀初頭までの史料が量的に限定されており、解釈に齟齬をきたす記録は現在のところ見当たらない。評者も近年翻刻された博多町人の年代記が含む貨幣・物価関係の記事を集中的に分析する機会を得たが、いずれも藤本氏の議論を土台として整合的に理解できた。²⁾この博多町人の年代記においても、一八世紀初頭の元禄・宝永から享保期にかけて幕府の改鑄政策によって引き起された経済的混乱が「金銀さわぎ」（銀相場の乱高下）や「新銀つまり」（新銀の供給不足）と直裁的に表現されると共に、銭貨が匁銭の形態をとって価値尺度機能を果たすようになる様子が描かれていた。

この一八世紀初頭の銀貨の急激な価値変動が銭貨の価値尺度機能を高めたという理解は、他地域にも一定の有効性を持つ。東北の南部藩・秋田藩でも幕府の改鑄政策に伴って同時期に銭建てが増加したことが報告されている。³⁾ただし列島レベルで見た場合、この事例に適合しない地域もあ

り、なお確定的な結論は得られない。この問題は、著者が主張する匁銭の「源泉」としての東アジア交易の評価にも関わるので、最後の命題のなかで言及しよう。

なお、第三の命題には、匁銭が民間経済のなかで自生的に生成されることを含めた。著者は、貨幣的な慣行の多くが、その発行主体の意図とは別に「現実の流通過程に生成」するものであり（一三七頁）、匁銭もまた「現実流通過程から胎生したのが始原であった」（二四二頁）という。本書の理解では、やがて匁銭は公権力の統制を受けて「匁銭」などと呼ばれる「領国計算貨幣」となるが、始原においては民間経済の日々の取引活動がその生成の源であったのである。

匁銭が生成される主因には、既述の通り、銀貨に対する錢貨の貨幣機能の向上がある。匁銭が成立当初に銀の代替的な意味を有したことは、「匁」の単位をとることからも明白だろう。ただ、ここではもう一つの要因として匁銭が緡銭形態をとることに注目したい。一枚一枚の錢が紐で束ねられて緡銭となること自体に、匁銭の自生的な成立要因を読み取るのである。

匁銭の成立過程が、一定の取引空間で緡銭の文数が特定

の数値に収束し、やがて硬直性を帯びるようになることだとすれば、この過程は緡銭自体の性質から説明できる。

論証は簡単である。まず一定の取引空間における緡銭の文数の標準化は、計算と取引にかかるコストを引き下げるはずである⁽⁴⁾。加えて、緡銭がある枚数に定着したなかで、別の文数の緡銭を用いることは個々の経営主体にとって取引コストを高めるだけでメリットに乏しい。緡銭の文数の変更も、取引の参加主体全てに適用されるだけに、コストに見合った効果・合理性（銀錢相場の変動への対応など）がなければ実現し難い。こうした一種のネットワーク外部性により、緡銭の文数がひとたび標準化されてしまえば、長期に渡って錢量が固定化することは容易に理解できる⁽⁵⁾。藩札などを分析から一時的に除外し、錢貨特有の現象として匁銭に着目した本書の視座からはこうした理解が導き出されよう。

第四の命題は匁銭の固定化に関わる議論である。すなわち、匁銭の一匁あたりの価値（錢量）は成立当初は銀錢相場に準拠するが、やがて「領国計算貨幣」として錢量の固定化が見られ、九六錢（九六〇文）の約数である八、六などの倍数に落ち着くものが多い、と整理される。六〇文錢

などの一部の匁銭が九六銭と接続することは、著者が引用するように、草間直方など同時代人の証言もあり、まず間違いない。六〇文銭を一六本(個)束ねれば、九六銭の一貫緡(九六〇文)となる。匁銭が持つ計算上の無意味さもこれで解消される。

ただし、匁銭を九六銭に結び付けることで、一見すると相反する特性を匁銭が帯びることに留意する必要がある。匁銭は「領国計算貨幣」として領国内の銭貨流通を規定する閉鎖性を持つ一方、それが全国的に普及した省銭の九六銭に繋がるといふ開放性を帯びることになるのである。

もつともこの匁銭の二重性は、本書に展開された論理によって矛盾なく理解される。一八世紀以降、列島規模で本格化する大小の「国産」化(商品作物生産の拡大)の動きと、領内市場・地域市場からの商品作物の集荷とその遠隔地(大坂中央市場など)への販売を想起すれば、匁銭の二重性こそが列島社会の大規模な経済構造の転回を反映するものだったとさえいえる。

事実、一八世紀前半の西南地域における銭建て地域の成立によって、瀬戸内など主要な海運ルートにおける銭貨の輸送量は一時的に増加に転じたと予想される。例えば、元

文三年(一七三八)、大坂市中で九州など「西国」への銭貨の流出が増加し、銭相場が高騰したとして、域外への銭貨輸送が原則禁止されている。⁽⁶⁾ 仮に銭建て経済圏の成立に伴って小農を中心とした銭貨需要の高まりがあったとすれば、この時期、九州などから瀬戸内を通じて中央市場に産物を販売したのち、代価や帰り荷に銭貨を選択する商船が多数出現したであろう。⁽⁷⁾ 著者が強調するように、海上交通の発達によって、隔地間決済などに要する銭貨の輸送コストは決して高くないからである。⁽⁸⁾ こうした中長期的な実態・経済の動きは本書では触れられないが、今後の魅力的な実証課題の一つといえる。

第五の命題は、九六銭と匁銭の淵源に関わる著者の最新の見解である。すなわち東アジアの国際交易に用いられる単位の「斤」が、日本・清朝間の銅と銭貨の共通の単位となったことに、九六銭と匁銭の由来があるとみる。この仮説は、従来、国内事情のみから検討されてきた匁銭の議論の枠組みを越え、分析範囲を東アジアにまで拡張した点で意欲的なものだが、他の評者と同様、この点に関しては疑問符が⁽⁹⁾付く。

確かに著者が指摘するように、斤の単位と九六銭・匁銭

は八や六の単純な整数の比例関係にある。だが、こうした計算上の一致を根拠に、九六銭・匁銭の「源泉」までを説明するのは難しい。史実においても、地金の日本銅と清朝の銅銭が単位「斤」に基づいて「等価交換基準」にあるとされるが、実際の銅銭は銅に亜鉛・錫などを掛け合わせた青銅銭であり、著者が根拠とした関係式自体が成立しない可能性もある。こうした細かな点を除いても、この仮説の証明にはなお段階的な論証が必要となろう。

また西南地域を中心とした対外的な交易関係に九六銭・匁銭の淵源を求める論理展開は、岩橋勝氏が明らかにした東北・山陰地域における銭遣いと整合性も欠く。岩橋氏によると、津軽藩では北部九州などで匁銭が登場する以前、すでに一七世紀段階で六〇文を一匁とする銭匁勘定が史料上で確認される⁽¹⁰⁾。また出雲松江藩でも一八世紀に銭遣いが優勢となっている⁽¹¹⁾。列島全体で近世日本の銭貨流通を考えると、果たして対外的な交易関係から匁銭（銭匁遣い）の出現を説明できるのか。なお慎重な検討が求められる。

最後に本書の主題と構成に関わり、五つの命題から導き出される課題点に言及しておきたい。

本書における最も意欲的な点は、国内事情にのみ議論が

終始していた匁銭の問題を東・東南アジアの交易・国際関係にまで視座を拡張させた点にあることは衆目の一致するところであろう。評者もこの視座は共有するものの、分析の焦点は、国際的な単位の共有や系統関係だけでなく、匁銭のような貨幣現象を生み出す構造の比較史的な解明にあるべきだと考える。第三の命題で述べたように、匁銭の「源泉」はそれを生み出す経済主体たちが形成する構造自体にあるからである。本書の構成が経済政策（第一部）と民間経済（第二部）から貨幣（第三・四部）へという論理展開を持っていただけに、匁銭を生み出す構造的要因が国際的次元で回収されなかった点は惜しまれる。

しかし東・東南アジアを俯瞰した巨視的視座に立つとき、藩領国などの一定の空間で銭量が標準化・固定化するという本書が示す匁銭の特性は極めて示唆的である。これがすぐれて近世日本特有の現象であることは、様々な貨幣が重層的・非統一的に流通する伝統中国などのケースを想起すればよいだろう。明清や民国期中国は「雑種幣制」などと表現されるように、貨幣の単位や価値を経済主体間で不断に差違化していく動機が強く働く経済社会であった⁽¹²⁾。これは多様な銭種と緡銭が現れた中世日本にも共通する。この

点からすれば、匁銭に象徴的に示されるように、地域ごとに貨幣的な様式・形式が標準化されることにこそ、近世日本の銭貨、あるいは貨幣の特徴があつたといえる。⁽¹³⁾それは単に国制の違いだけでなく、この種の貨幣現象を生み出す経済組織や市場構造、地域社会のあり方などの差違が構造的要因として働いた結果と考えられるが、これらの問題は著者の匁銭の命題から導き出される新たな課題といえよう。著者が最初に学問的な注意を向けた匁銭が、列島社会、さらに東・東南アジアの経済・市場構造のなかでいかなる歴史的意義を有するのか。本書が提起する問いは、著者だけでなく、後学の評者も含め、近世日本の貨幣、とりわけ銭貨に関心を持つ者にとって、なお新たな課題として共有されている。

おわりに

小稿では、本書の構成と内容を紹介し、そこに提示された見解を命題群として整理して、批判的な検討を加えた。著者の見解と意図を十分に汲み取れていないところ、また評者の問題関心に引き付けて理解したところも多い。いずれも評者の浅学と理解不足によるものであり、著者の御海

容を乞う。

近年、計算機の性能が加速度的に向上したことで、歴史学においても数字の裏にある隠れた規則性や意味を読み取ることが格段に容易となった。これに対し、戦後開始された著者の経済史研究は、商家や村方の膨大な帳簿群を前に、手回し計算機を幾度も廻し、文字通り、手探りで史料の数字を読み解くことで創り上げられた。⁽¹⁴⁾匁銭という一見不可思議な貨幣現象を、現在齟齬なく理解できること、その解明に長年努められた著者の学恩に感謝したい。

なお仄聞するところでは、著者は目下、近世の捕鯨業に関する論考をまとめられつつあるという。氏の捕鯨史研究の特色は、経済史・貨幣史同様に史料を深く読み込み、歴史像を丹念に描き出すところにある。この分野での仕事の集大成も後学として心待ちにしたい。

(1) 岩橋氏の銭匁遣い研究は、岩橋勝「近世貨幣経済のダイナミズム―熊本藩領を事例として―」(『社会経済史学』七七―四、二〇一二年、三―二五頁)など参照。またこの分野の研究史整理は、鹿野嘉昭『藩札の経済学』(東洋経済新報社、二〇一一年)一三七―一七四頁。

(2) 近世博多年代記研究会(校註代表 秀村選三)編『磯

野五兵衛覚書 近世博多年代記 地域史資料叢書 第三

輯」(近世博多年代記研究会、二〇一三年)。本史料の物
価・貨幣関係の記事は、評者執筆の解題部分(一九九
二〇六頁)参照。

(3) 国安寛「土地証文等における代物の地域性とその変化
―秋田藩享保改革案―」(『秋大史学』三五卷、一九八九
年、一―四六頁)。

(4) 寛保元年(一七四二)、博多市中で緡銭(「錢目之貫」)
の種類が増えたため、「猥り之貫」に規制が加えられた
のも、こうした事情がある(本書一八八―一八九頁)。

(5) ただし、より本質的な問題は貨幣を標準化する取引空
間のあり方である。後述するように、この点は貨幣・市
場をめぐる国家や地域社会の構造的な特質と種差に関係
する。こうした分析視座は、註(12)の黒田明伸氏の論考
も参照。

(6) 『大阪市史』第三、大阪市参事会、一九一一年(復刻
版一九六五年)、四一八頁、触一七〇六号。なお、註
(2)の評者執筆の史料解題には、本史料の典拠表示に誤
りがあった。お詫びして訂正したい。

(7) 大坂などから西南日本への銭貨の大量移動の可能性は、
文脈は異なるが、鹿野嘉昭氏も藤本氏の益富組の帳簿分
析を基に言及する(鹿野嘉昭『藩札の経済学』一五六―
一五八頁)。

(8) この点は、かつて評者も藤本氏の研究を引き指摘した
(拙稿「備中地域における銭流通」『岡山地方史研究』九

九、二〇〇二年、二四頁)。

(9) 安国良「書評と紹介 藤本隆士著『近世匁銭の研
究』」(『日本歴史』第八〇五号、二〇一五年、一〇〇―
一〇二頁)。

(10) 岩橋勝「近世銭匁遣い成立の要因―津軽地方を事例と
して―」(『松山大学論集』第二二卷第四号、二〇一〇年、
一―三〇頁)。

(11) 岩橋勝「出雲松江藩の銭遣い」(『松山大学論集』第二
四卷第四―二号、二〇一二年、四三―七八頁)。

(12) こうした理解は主に黒田明伸氏の論考に拠る。黒田明
伸『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会、一
九九四年。同『貨幣システムの世界史―「非対称性」を
よむ―』岩波書店、二〇〇三年(増補新版二〇一四年)。

(13) この意味で著者が近世日本の省銭が九六銭のみに集約
化されたことを評価している点に注目したい(二七四頁)。

(14) 本書あとがき。藤本隆士「物価史研究から「匁銭」
へ」(『経済史研究』二卷、一九九八年、一九〇―一九三
頁)。

藤本隆士著『近世匁銭の研究』(吉川弘文館、二〇一四年七
月刊、A5判、六+三七〇+6頁、本体価格一三、〇〇〇
円)

(こが やすし・土佐山内家宝資料館学芸員)